北海道博物館研究紀要　Bulletin of Hokkaido Museum 11: 13-20, 2026

研究ノート

参加型展示コーナー「おすすめミュージアムをおしえて！」における来館者の声の1年間の集計および解析

鈴木あすみ・渋谷美月・鈴木明世・高橋佳久・青柳かつら・櫻井万里子

Key Words　参加型展示（Participatory exhibition）、来館者の関与（Visitor engagement）、地域の博物館（Regional museums）、来館者の認識（Visitor perceptions）

1　はじめに

北海道博物館では、総合展示室2階出口付近にて参加型展示「北海道の〇〇〇あなたは？」（以下「参加型展示コーナー」と呼ぶ）を展開している（図1）。参加型展示コーナーでは、北海道をめぐる話題について、一緒に考え、より深く知るきっかけにしていただくことを目的に、設定された話題についての来館者の声を収集し、掲示している（北海道博物館2018、2024）。2015年の開館より随時テーマを更新しながら現在まで継続していて、これまでに「あなたはヒグマと共存できる？（2015、2016年度）」や「乗り物の思い出おしえてください（2024年度；特別展に関連させたテーマ）」などのテーマを取り上げてきた（表1）。いずれのテーマでも、参加型展示コーナーを訪れた来館者が回答用紙に記入して投函する形式で、寄せられた声のうち一部を掲示する形で展示を行っている。総合展示第2テーマの「アイヌ文化Q&A」と並び、来館者の声を直接反映するコーナーとなっている。

展示は、A0サイズより一回り大きい説明パネル（幅900mm×高さ1200mm）とスチール製の壁面ボード（幅2080mm×高さ2680mm）、A6サイズ回答用紙2～4種類、投函機能付きの机と筆記具で構成される。運用方法は以下の①～②の通りである。①展示コーナーを訪れた来館者は説明パネルに書かれた問いかけや掲示された過去の来館者の回答内容を見て、自らに当てはまる回答用紙を選び取り、回答を記入し投函していく。②後日、スタッフが用紙を回収して内容を確認し、一部を壁面ボードに掲示する。

図1　参加型展示の様子（2026年1月17日筆者撮影）

本稿では、参加型展示コーナーでこれまでに取り上げたテーマのうち2024年10月より展示中の「おすすめミュージアムをおしえて！」（以下「本テーマ」と呼ぶ）について紹介するとともに、寄せられた回答について簡単に分析した結果を報告する。

表1　参加型展示コーナーでこれまでに取り上げたテーマ

	テーマ	開始	終了
1	あなたはヒグマと共存できる？	2015/4/18	2017/3/31
2	北海道のココを旅したい！	2017/4/1	2019/4/19
3	北海道のココを旅したい！『とっておきの地名』	2019/4/20	2020/6/16
4	北海道のおいしいお肉と言えば…	2020/6/17	2021/7/12
5	湿地の沼ハマり度診断	2021/7/13	2022/7/22
6	あなたの好き or 嫌いな昆虫は？	2022/7/23	2022/9/25
7	湿地の沼ハマり度診断（5 と同内容）	2022/9/27	2024/4/19
8	乗り物の思い出おしえてください	2024/4/20	2024/10/24
9	おすすめミュージアムをおしえて！	2024/10/25	（継続中）

鈴木あすみ・渋谷美月・鈴木明世・高橋佳久・青柳かつら・櫻井万里子：北海道博物館　博物館研究センター

2　展示紹介

（1）基本情報（2026年2月1日現在）

テーマ：おすすめミュージアムをおしえて！
会期：2024年10月25日～継続中
内容：説明パネル（図2）では、「おすすめミュージアムをおしえて！」という問いかけに加えて、「どんな人におすすめ？4つの中から選んでご記入ください。」という質問を投げかけた。回答者は4つの選択肢の中から好きな回答用紙（図3）を選択して記入する。回答用紙の項目は4つとも同様で、タイトルと色が異なる（①こどもにおすすめ（紙の色は黄）、②非日常にとびこみたい人におすすめ（紙の色は青）、③地域をしりたい人におすすめ（紙の色は緑）、④「　　」マニアにおすすめ（紙の色はピンク）（以下、それぞれ「こども」「非日常」「地域」「マニア」と呼ぶ））。回答を補助する目的で、説明パネル上にミュージアムの例として、「博物館、資料館、美術館、科学館、動物園、水族館」と列挙したほか、壁面ボードには北海道博物館協会加盟館園の位置と名称を示す地図と、同じく北海道博物館協会のウェブサイト（https://www.hkma.jp/museums）および北海道デジタルミュージアム（https://hokkaido-digital-museum.jp/museum-list/）のそれぞれ博物館一覧が表示されるURLを二次元コードで掲示した（図4）。

（2）企画

2024年に研究部博物館研究グループ（当時）の渋谷学芸員が中心となって企画した。本テーマは、参加型展示コーナーのなかで比較的長期運用することを想定し、あえて最新のトピックを取り上げない形で制作された。

博物館という言葉は、博物館法の一部を改正する法律（令和4年法律第24号）や国際博物館会議（ICOM）などにより様々に定義されている（ICOM日本委員会 2023；五月女 2024；平田 2025）。文部科学省の社会教育調査では、総合博物館、歴史博物館、美術博物館、科学博物館、動物園、水族館、植物園、動植物園、野外

図2 「おすすめミュージアムをおしえて！」説明パネル

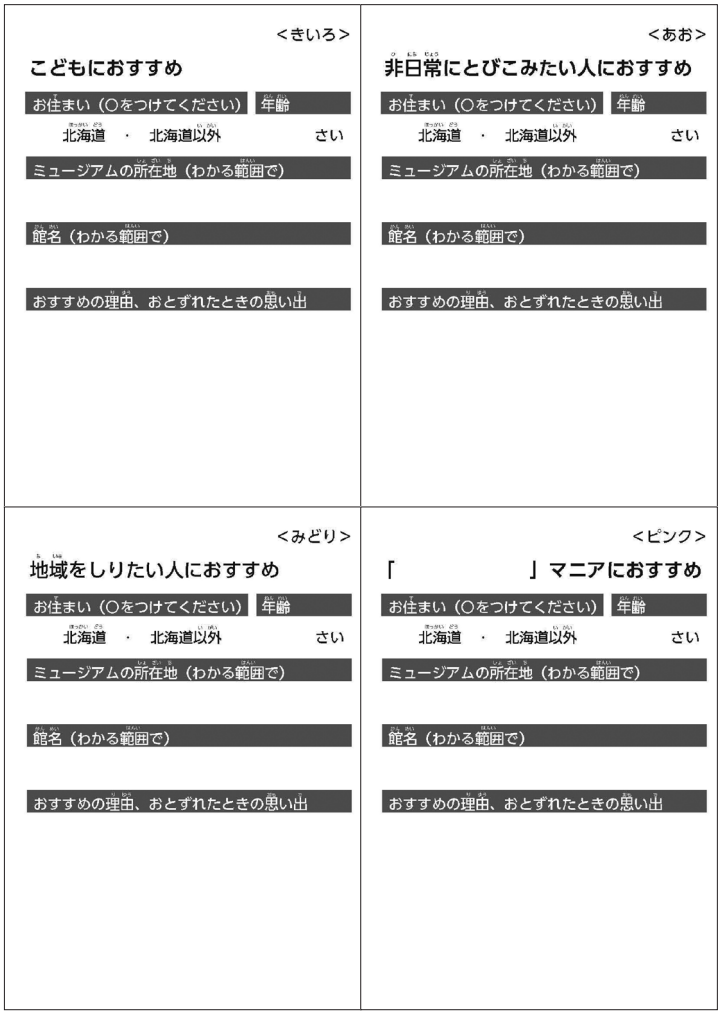

図3 「おすすめミュージアムをおしえて！」回答用紙
左上：①こどもにおすすめ
右上：②非日常にとびこみたい人におすすめ
左下：③地域をしりたい人におすすめ
右下：④「　　」マニアにおすすめ

図4 「おすすめミュージアムをおしえて！」の壁面パネルの展示（2025年11月13日筆者撮影）

博物館の9つに分類される。このように博物館には様々な館種が含まれるが、本テーマでは来館者にとってのイメージを優先し、狭義の意味で受け取られる可能性を含む「博物館」ではなく、UNESCO（2015）にも使用された「ミュージアム」を使用することで、より多様な回答が得られるように工夫した。

北海道内のおすすめミュージアムをテーマに交流することで、当館以外の博物館への関心を高め、さらなる学びや楽しみの機会を持ち帰ってもらうことが本テーマの目標である。

3　方法

（1）収集データ

対象は、2024年11月1日から2025年10月31日までの1年間（開館日数306日）に収集した回答とした。回答のうち、白紙や明らかに無関係な内容のものは集計対象から除外したが、博物館法上の博物館に該当しない施設（例：公園やギャラリーなど）については、来館者の認識を尊重し集計対象とした。集計対象の回答は、表記の統一や誤字修正等のデータ整形を行った上で、ミュージアムの所在地を北海道の行政区分にならって14個の総合振興局・振興局に分類した項目を追加し、以下の10項目に整理して分析に用いた。a：通し番号、b：回収日、c：回答者の居住地（道内・道外）、d：回答者の年齢、e：回答用紙の種類（こども・非日常・地域・マニア）、f：おすすめミュージアムの館名、g：おすすめミュージアムの所在地（市町村名）、h：おすすめミュージアムの所在エリア（総合振興局・振興局名）、i：おすすめの理由、j：マニアのキーワード（「マニア」の回答用紙のみ、カギ括弧内の記述内容）。

（2）解析方法

解析にはR version 4.5.1（R Core Team 2025）およびRStudio 2025.09.1（Posit team 2025）を使用した。まず、回収日と回答者の属性（回答者の年齢および回答者の居住地）、回答内容（回答用紙の種類およびマニアのキーワード）に注目して、回答数の比較を行った。次に、おすすめミュージアムの館名およびおすすめミュージアムの所在エリアごとに回答数の合計を算出し、比較を行った。

本稿の執筆にあたっては、本テーマの企画および設計を渋谷、本テーマの運用およびデータ集計、分析前後の議論を青柳、櫻井、高橋、鈴木明世、前述の運用と集計に加えて回答内容の分析およびまとめを鈴木あすみが分担した。

4　結果

（1）回答数

1年間で597件の回答を得た。このうち、道外の施設についての回答が50件、内容に不備のある回答が7件、無関係な内容または具体的な記述はあるが館名の特定が困難などの理由で無効とした回答が9件あった。これらを除いた531件を集計対象とし、解析を行った。

ひと月あたりの回答数は平均44.25件で、最も少なかった2024年12月で20件、最も多かった2025年8月では85件の回答があった。なお、期間中の総合展示入場者数（以下、本稿では入館者数として扱う）の総計は70,718人で、回答率は約0.75%であった。図5に月ごとの回答率および入館者数の推移を示す。

（2）回答者の属性

回答者の年代および居住地別の回答数については表2にまとめた。回答者の半数以上を9歳以下および10代が占め、20代以降は年齢層が上がるにつれて回答数が少なくなる結果が得られた。年齢別の回答数では、6歳から12歳までがボリュームゾーンとなり、小学生の年代が多く回答していた。

回答全体では70代以上を除くほぼすべての年代で道内在住者からの回答が多く、道外在住者の約5.4倍となった。割合はそれぞれ、道内が約84%、道外が約16%であった（無回答を除く）。

（3）回答内容

最も多く選ばれた回答用紙は「こども」で全体の3分の1以上を占めた。次いで「マニア」、「地域」の順に多く、「非日常」を選択した人は少なかった（表3）。「マニア」の回答用紙のカギ括弧内の記述内容、マニアのキーワードでは、68種（表記ゆれはまとめた）のキーワードが集まった。特に多かったのは歴史（17票）、

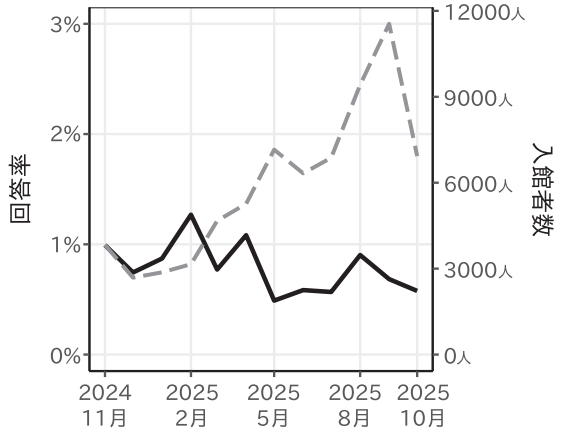

図5　回答率（実線）および入館者数（破線）の推移

表2　年代別・居住地別の回答数

年代	小計	(	道内	道外	回答なし	)
9 歳以下	147	(	129	14	4	)
10 代	149	(	126	22	1	)
20 代	64	(	41	23	0	)
30 代	38	(	36	2	0	)
40 代	23	(	20	3	0	)
50 代	22	(	15	7	0	)
60 代	11	(	9	2	0	)
70 代以上	3	(	0	3	0	)
無回答	74	(	65	6	3	)
合計	531	(	441	82	8	)

表3　選ばれた回答用紙の種類

回答用紙の種類	N	%
こどもにおすすめ	184	*34.7%*
非日常にとびこみたい人におすすめ	61	*11.5%*
地域をしりたい人におすすめ	122	*23.0%*
「　　」マニアにおすすめ	164	*30.9%*

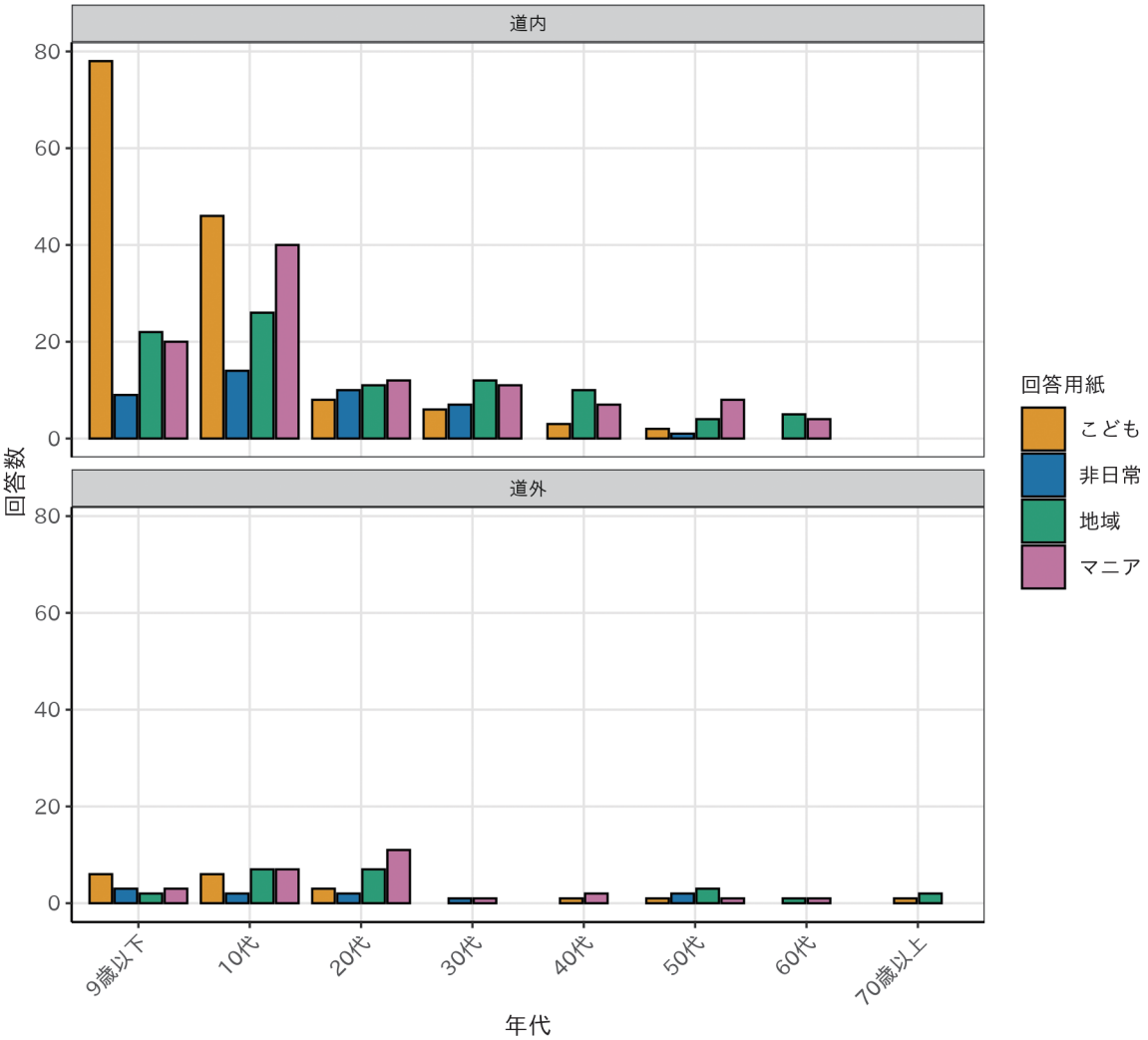

図6　居住地・年代・用紙の色のクロス集計の結果

ゴールデンカムイ（14票）、鉄道・交通（13票）、次いでアンモナイト（7票）、動物（7票）、アイヌ（6票）、炭鉱（6票）などであった。

選ばれた回答用紙の種類について傾向を調べるため、居住地および年代別のクロス集計を行った（図6）。道内在住者で最も多かったのは、9歳以下×「こども」（78票）、次いで10代×「こども」（46票）、10代×「マニア」（40票）だった。道外在住者で最も多かったのは20代×「マニア」（11票）、次いで10代×「マニア」、10代×「地域」、20代×「地域」（いずれも7票）だった。

おすすめミュージアムの館名には、全部で175件が挙げられた。種別でみると、博物館や水族館、科学館、動物園などの博物館施設が挙がったほかに、公園やスポーツ施設などのレジャー施設や公共施設、ギャラリー併設の飲食店などについても情報が寄せられた。多くの回答が集まったおすすめミュージアム上位10館を以下に紹介する。北海道博物館（札幌市厚別区、71票）、おたる水族館（小樽市、20票）、サケのふるさと千歳水族館（千歳市、20票）、三笠市立博物館（三笠市、16票）、札幌市青少年科学館（札幌市厚別区、16票）、ウポポイ（国立アイヌ民族博物館）（白老町、14票）、北海道大学総合博物館（札幌市北区、14票）、北海道開拓の村（札幌市厚別区、13票）、札幌市円山動物園（札幌市中央区、13票）、旭川市科学館サイパル（旭川市、12票）。

おすすめミュージアムの所在エリアをまとめたところ、すべての総合振興局・振興局（計14エリア）で2件以上のおすすめミュージアムの回答が寄せられ、一定の網羅性が認められた（図7）。

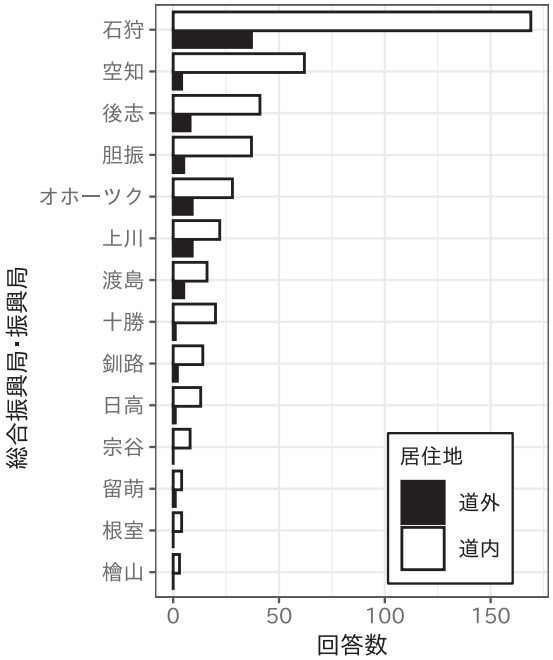

図7　おすすめミュージアムの所在エリア（総合振興局・振興局）ごとの回答数（居住地別）

5　考察

本稿は、北海道博物館内で収集された回答を分析したものであり、この結果は札幌市厚別区に所在する総合博物館である当館への来館履歴がある人々の傾向を反映したものである。したがって、結果は道内の博物館を偏りなく網羅するものではない。また、参加型展示コーナーでは1人あたりの回答数に上限は設けていない。内容や筆跡から、1人が複数の回答用紙に記入したと判断できるケースも見られた。

以上を踏まえ、以降では来館者がミュージアムと認識し、他者におすすめしたい施設（＝おすすめミュージアム）についての解析結果について考察する。

（1）回答数の季節変化

当館の入館者は例年8〜9月に多くなる傾向があり、本テーマでも同様に8〜9月に多くの回答が集まった。期間前半（2024年11月〜2025年4月）は、後半（2025年5月〜10月）よりも各月の入館者が少ないが、回答率は平均以上であり、入館者数が少ない月の方が回答率は高くなった。

（2）回答者の年齢、居住地および回答内容

回答者の多くが10代以下の若年層であり、6歳から12歳までの小学生の年代から多くの回答を集めた。無回答を除くと30代までの年代の回答が全体の9割弱を占め、年齢層が上がるにつれて回答数は減少し、本テーマへの参加意欲が下がる傾向が伺える。当館へは家族で来館するお客様も多くいることから、20代以上の親世代からの「こども」へのおすすめがあることを期待したが、そのような結果は得られなかった。

また、年齢の回答がなかった回答用紙は74票（約14%）と少なくなかった。回答用紙には、年齢欄を選択式ではなく「さい」と欄内に印刷した形で自由記述とした（図3）ことから、具体的な回答をする必要があると判断して、年齢を知られたくない回答者が記入を避けた可能性もある。今回の解析で、大人と子供で傾向が異なることが明らかになったため、今後より多くの比較可能なサンプルを収集するならば、自由記述のほかにより単純に丸をつけるだけで回答できる補助的な設問（例：「おとな」「20〜30代」等）を付すなどして、無回答を減らす対策を講じる必要があると考えられる。

居住地別では、道内在住者からの回答が多かった。当館が調査期間と同時期に実施した企画テーマ展・特別展の来場者アンケート（以下、来場者アンケートと呼

ぶ）5回分を平均すると、札幌市および江別市からの来館者が約65%を占め、これらを含む道内が81%、道外からの来館者は全体の19%であった（北海道博物館 未発表）。いずれも特別展示室で得られた結果であるが、総合展示室で展開した本テーマの回答者の居住地構成（道内84%、道外16%、無回答除く）とほとんど同様であり、居住地による回答数の差はほとんどないものと考えられる。その一方で、表2および図6の結果からは、居住地による回答傾向の違いを読み取ることができる。道内在住では、「こども」の回答数が多く、小学生以下（12歳以下）の年代が同世代のこどもに向けておすすめする傾向が見られた。道外在住では、「マニア」「地域」への回答数が比較的多く、小学生以下よりも10代後半から29歳までの若者からの回答が多いといった傾向の違いがみられた。

おすすめミュージアムの所在エリアについても異なる傾向がみられた（図7）。道内在住では、当館の属する石狩やそれに隣接する空知（三笠市立博物館、三笠鉄道記念館など）・後志（おたる水族館、真狩村羊蹄ふるさと館など）・胆振（ウポポイ（国立アイヌ民族博物館）、むかわ町穂別博物館など）への回答が多く、札幌に近いエリアの施設に回答が集中した。一方、道外在住では、石狩が最も多い点は同様であったが、上川（北鎮記念館、旭川市科学館サイパルなど）やオホーツク（北海道立オホーツク流氷科学センター、北海道立北方民族博物館など）といった札幌から離れたエリアが2,3位に入り、空知・後志・胆振への回答はそれより少ないという違いがみられた。これらの結果からは、札幌圏内で楽しむ道内在住者と“聖地巡り”や“推し活”のために道内を広く巡る若い道外観光客の姿が浮かぶ。

おすすめミュージアムの上位10件の所在地を見ると、札幌市内が5件（うち厚別区内3件）、千歳市や小樽市、三笠市など、当館から車で片道1時間以内の距離にある当館から近い施設が多くの回答を集めていたことがわかった。来場者アンケートと同様の傾向とすれば、道内在住者のうち半数以上は当館近郊在住であった可能性が高く、日帰り圏内のエリアが好まれたことが回答数を集めた1つの要因と考えられる。

水族館や科学館は多くの回答があった。どちらも「こども」の回答数が多かったが、水族館では5割のみで他の選択肢にも分散し、科学館では7割超になる偏りがみられ、おすすめの理由の傾向は異なっていた。一方で、美術館では18位の安田侃彫刻美術館アルテピアッツァ美唄が最上位で、札幌市内にも多くの美術館があるにもかかわらず、本テーマではあまり選ばれない結果となった。なお、美術館の回答用紙の内訳は「非日常」42%、「こども」と「地域」が21%であった。本テーマで設定した項目が美術館とマッチしなかった可能性や、当館の来館者の興味と合致しなかった可能性が考えられる。

6　おわりに

同じ回答日に近い年代の人による類似した内容の投稿も見受けられ、グループ内で会話をして回答をしたとも想像される。実際に展示室では、グループでの来館者が参加型展示コーナーの前で立ち止まり、会話が生まれている様子も観察された。

回答者の年代・居住地や回答用紙の種類には明確な傾向があり、本テーマで目指した、他者のおすすめや道内の博物館マップを見て、自身の過去の博物館体験を振り返り、その魅力を伝える行動は、特に道内在住の小学生達にとって参加したくなる体験になったことがうかがわれた。

本稿では自由記述式の回答項目である「おすすめの理由」についての解析を行うには至らなかった。本項目を含め、本報告で取り上げた以外にも多くの情報が得られたことから、今後も引き続き情報を集積することで年ごとの変化や開催中の企画展との関連性、当館来館者の興味関心などについてのより詳細な解析が可能になると考えられる。

引用文献

平田大二 2025. 2022年の博物館法改正までの経緯と自然史標本の所在. 地学雑誌 134（1）：89-104. https://doi.org/10.5026/jgeography.134.89

北海道博物館 2018. 北海道博物館要覧 2016・2017.

北海道博物館 2024. 北海道博物館要覧 第8号（要覧2022・2023年度）－第2期中期目標・計画　実績報告書3－：1-174.

ICOM日本委員会 2023. ICOM新しい博物館定義（日本語訳）. https://icomjapan.org/journal/2023/01/16/p-3188/（2026年1月27日閲覧）

Posit team 2025. RStudio: Integrated Development Environment for R. Posit Software, PBC, Boston, MA. http://www.posit.co/

R Core Team 2025. R: A Language and Environment for Statistical Computing. R Foundation for Statistical Computing, Vienna, Austria. https://www.R-project.org/

五月女賢司 2024. 国際博物館会議（ICOM）による「Museum」の新定義とこれからの博物館. 日本の科学者 59（12）：10-18. https://doi.org/10.60233/jjsci.59.12_10

UNESCO（国際連合教育科学文化機関） 2015. ミュージアムとコレクションの保存活用、その多様性と社会における役割に関する勧告（ICOM日本委員会訳）.

NOTES AND SUGGESTIONS

One-Year Tabulation and Analysis of Visitor Responses from the Participatory Exhibition Corner "Tell Us Your Recommended Museum!"

SUZUKI Asumi, SHIBUYA Mizuki, SUZUKI Akiyo, TAKAHASHI Yoshihisa,
AOYAGI Katsura and SAKURAI Mariko

This paper analyzes visitor responses collected at a participatory exhibition corner titled "Tell Us Your Recommended Museum!" installed near the exit of the permanent exhibition at the Hokkaido Museum. Since 2015, this space has regularly collected visitor comments on various themes, aiming to encourage reflection and engagement with topics related to Hokkaido. The 2024–present installation invites visitors to recommend museums and select one of four themed answer sheets ("for children," "for those seeking extraordinary experiences," "for those wanting to learn about local areas," and "for enthusiasts of a specific field").

We analyzed responses collected over one year (1 November 2024–31 October 2025; 306 open days). After excluding blank or invalid entries, 531 responses were used for analysis. More than half of all respondents were under the age of 10 or in their teens, indicating strong engagement among younger visitors. Responses from Hokkaido residents outnumbered those from outside the region by a factor of 5.4.

The most frequently selected answer sheet was "for children," followed by "for enthusiasts." Within the "for enthusiasts" category, 68 areas of interest were mentioned, most commonly history, *Golden Kamuy*, transportation, ammonites, animals, Ainu culture, and coal mining. The collected responses recommended a total of 175 distinct facilities, including museums, science centers, zoos, aquariums, and other leisure venues. The recommended facilities were distributed throughout all 14 subprefectures of Hokkaido.

The results highlight differing participation patterns: children within Hokkaido tended to make recommendations aimed at other children, and visitors from within Hokkaido tended to recommend museums easily accessible from the Hokkaido Museum. In contrast, young visitors from outside Hokkaido recommended museums across wider regions, reflecting motivations related to tourism and "pilgrimage" travel. Our findings suggest that the exhibition fostered conversational engagement within visiting groups, and functioned as a catalyst for shared reflection on museum experiences. Continued data collection will allow for analysis of changes over time.

SUZUKI Asumi, SHIBUYA Mizuki, SUZUKI Akiyo, TAKAHASHI Yoshihisa, AOYAGI Katsura and SAKURAI Mariko :
Museum Research Center, Hokkaido Museum